

# JAICOH NEWS LETTER

NO : 56 2008 年 12 月発行



歯科保健医療国際協力協議会

Japan Association of International Cooperation for Oral Health

事務局：〒344-0003 埼玉県三郷市彦成 3-86 Tel&Fax：048-957-2286

発行：深井穫博 編集：植崎正子、梁瀬智子

**特集!**

## 第19回歯科保健医療国際協力協議会 学術大会事後抄録集



### トンガ王国におけるプロジェクトをめぐるアクターへの考察

○河村サユリ 1) 河村康二 1) 遠藤真美 2)

1)南太平洋医療隊、カウムラ歯科医院 2)日本大学松戸歯学部 障害者歯科学講座

#### 目的

南太平洋医療隊は'97年よりトンガ王国において、歯科診療・歯科保健・機器剤の提供等の活動を行っている。小学生を対象とした歯科保健活動をトンガ語で笑顔を意味する”マリマリプログラム”とし、2006年より3年間はJICAとの連携を得、展開している。当地カウンターパートとの好関係で対象小学校の拡大・活動経験者の増加を認める。JICAとは有期限の連携でかつ明確な成果を期待されている。また本活動を担うトンガ歯科スタッフの労力が増大し、経済面からも見直しをするべく時期に来ていると考えられた為、アクター（利益関係者）となる人々に本活動の新たな開発から発展への機動力となるべく起爆剤としての提案を行った。

#### 対象および方法

活動対象地域（トンガタブ本島・ハーパイ諸島）にある、小学校教師に質問紙により調査を行った。現在活動対象校のうち、トンガタブ本島 11校、ハーパイ諸島 4校では歯科健診・歯科保健指導

時に教師に調査の意図と背景を説明し行った。ま

た後日、トンガタブ本島の全公立小学校・幼稚園教師を対象に開催したワークショップ時に同様の調査を行った。質問紙は公用語である英語

を使用し、4項目の質問からなり、短時間で記載できるものとした。調査にあたりJICAとの連携は有期限であるが、南太平洋医療隊の支援は継続されることを示した。

#### 結果および考察

活動対象校 15校では、98名から回答を得、ワークショップ時には、77名から回答を得た。  
①マリマリプログラムを自身で継続していく意思の有無 ②将来、誰がこの事業を主体的に担うのがよいか（複数回答） ③プログラムを継続していく為 600～1200円を自己負担できるかを問う ④プログラムに対する意見を自由に記載する項目である。いずれの項目もワークショップ前の回答では 1 ないし 2 名の無回答がみられた

が、ワークショップ時の回答では全項目に全員が答えていた。①では、85%以上の教師が継続を



望み、児童にとってよいプログラムであると理解していた。②では、健康省をあげ政府サイドに担い手を求める回答が46%と多く、次いで歯科スタッフに期待する回答が38%であった。教師が主体となる項目を選択したものは15%、父兄という回答は11%であった。今後事業を継続していくうえで教師や父兄の協力は不可欠であり、期待できる結果といえる。

③有料・無料の問いでは、ワークショップ前には



70%近くの教師が無料をあげ、ワークショップ時では80%以上の教師が有料でも続ける意思を示した。援助されることに慣れているトンガ王国において、この結果をそのまま指示することのリスクは否定できないが、今後更なる協議を継続することで、トンガ人による事業の継承がなされると思われる。

332-0016  
3 8 14 048 256-0118  
E-Mail : sayuri2@postpet22.so-net.ne.jp

## 南太平洋トンガ王国ババウ諸島の小学1年生のう蝕罹患状況

○藤瀬多佳子 1) 河村康二 2) 河村サユリ 2)

1) Prince Wellington Ngu Hospital (JICA シニアボランティア) 2) NGO 南太平洋医療隊

### 当日の発表内容

私は現在、JICA ボランティア歯科医師として、日本から約8000km離れた南太平洋のトンガ王国ババウ島で活動中です。任期は、2007年3月から2年間。長期派遣ボランティアの利点は、現地の人々と生活を共にすることにより、同じ視線でものを見、目標を設定し、方針を立てて、協同して活動を行っていくことができる点にあります。

トンガ王国においては1997年より、日本のNGO 南太平洋医療隊が首都のあるトンガタブ島およびハーパイ諸島において、口腔保健活動を継続的に実施してきた経緯があります。本年度の

JAICOHの学術大会では、ババウの現状を把握する目的でWHOのフィラリア調査チームと協同して行った、ババウ諸島の小学1年生全員の歯科健診の結果を中心に発表させていただきました。現





在トンガ在住のため、当日は、共同演者である南太平洋医療隊の河村康二先生に原稿の代読をお願いしました。

今回調査を行った小学1年生は407名（平均年齢5歳7ヶ月）。う蝕罹患率は95%。dfは8,0でした。乳歯列期は28%（平均年齢5歳4ヶ月）、混合歯列期は72%（平均年齢5歳8ヶ月）を占め、混合歯列期の児童の31%に、すでに第一大臼歯のう蝕が認められ、DMFは1,0,0でした。



う蝕の原因は、輸入嗜好食品（アメ類等）の乱食、歯磨き習慣が徹底していないことなどが考えられます。トンガ王国全体の歯科医療従事者数は慢性的に不足していて、全人口約11万人に対し歯科医師数は私を含め8名。デンタルセラピスト約20名です。ババウ諸島（人口約1万6千人）の唯一の総合病院には、歯科医師2名（私を含む）、デンタルセラピスト1名が常勤しています。病院の運営予算は少なく、材料の供給の大半が先進国からの寄付に頼っています。マンパワー不足、材料不足、予算不足である一方、患者数は非常に多いのが現状です。



一家族当りの子供の数も多いため、保護者によるケアは期待できません。サンゴ礁に囲まれている島であるため飲料水の主体は天水で、水道水のフッ素化も不可能です。この状況を改善するためには、全小学生（約3000名）を対象に、学校巡回による歯磨き指導およびフッ素洗口による歯質の強化が急務であると考え、ババウ本島にある小学校21校に関しては毎週、離島の11校に対しては、数ヶ月に1度学校訪問を行い、フッ素洗口液を毎月デリバリーするシステムを確立し、現在実施中です。

JICA

2007 3 JICA

# トンガ王国の障害者施設における歯科医療ボランティア活動

○遠藤眞美 1、2) 河村康二 2、3) 河村サユリ 2、3)

1) 日本大学松戸歯学部 障害者歯科講座 2) 南太平洋医療隊 3) 河村歯科医院

南太平洋医療隊は、トンガ王国での歯科医療ボランティアを実施しています。活動内容は、現地歯科医療スタッフ(現地スタッフ)と協力をして保健システムの確立および予防歯科保健システムの推進です。具体的には、幼稚園と小学校でのフッ化物洗口や保健教育、住民に対するオーラルヘルスフェスティバル開催などです。学校歯科保健事業は、現地スタッフが通年で継続をしており、2006年、JICA 草の根技術事業(草の根協力支援型)に採択され、JICA との協力事業となっています。

2005年から、トンガ王国本島の通園と入所の各障害者施設(以下、施設)において活動を開始しました。



ALONGA (入所施設) にて記念撮影

活動は、施設利用者が歯科に関する保健活動や医療を受けられるように現地スタッフおよび施設職員への教育、現地スタッフと施設の連携作りを目的にしています。具体的には、現地スタッフおよび施設職員に対する障害者歯科学に関する知識および技術普及、歯科検診、健康教育、口腔ケア材料寄付、食事に対する支援、現地滞在中の専門職種ボランティアとの継続支援できる体制作りなどです。

2005年～2007年の3年間を通して以下のことを感じました。第1に、トンガ王国における障害者の現状は不明で、加えて障害者と医療との関わりも少ないため、家族および施設職員が対象者の疾患などを把握していないことが多い。第2に、年に数回の支援であり意識の継続に困難を要する。第3に、諸島から成るトンガ王国では本島以外に障害者の利用可能な施設はなかったため、国全体の支援へとつながるには時間がかかると予想できた。第4に、国際ボランティアの専門職種の滞在期間により継続した連携を取ることが出来ない。第5に、活動を継続希望する現地スタッフもいるが、業務増加などから活動継続に反対する者もいた。以上を理解した上で、現地スタッフが施設と定期的な関わりをもてるシステムの構築、加えて利用者に問題が生じた場合に、抵抗なく通院出来るような現地の連携作りを継続支援していきたいと考えています。



食事指導：反射を確認しているところ

初めて JICOH に参加し、皆様の熱意と工夫に活動のヒントを沢山頂きました。活動はそれぞれでも情報を共有し、様々な意見交換を行うことの必要性を改めて実感しました。そして、学生達が目を輝かし、自分達の意見を伝え、新たな情熱に変えている姿を見ることが出来たのは、大学に勤務している教育者の一人として嬉しく感じました。

17 3  
17 4  
17

## JAICOH 学術大会に参加して

河村サユリ／南太平洋医療隊、河村歯科医院

歯科を生業に日々奮闘しながら、ボランティアという社会で頑張っている仲間たちに会える数少ない空間。 楽し、うれしと荷づくりに励みトンガ王国へまっしぐらという年月を経て、今、開発支援の難しさに突き当たった感の私たち。 大同小異の経験を経て、さらに活動を充実・発展させている報告を知ることによって新たな決意がわきます。

かつて歯科医を目指した'70年代は大学闘争や反戦運動がほころび、街には海外からもたらされたブランド品が並び、やがてはバブル経済へと駆け上がる序段のころでした。

若者の無気力が話題に上り始めたころでもあります。

そんな中での学生時代、海外へ飛び出すことすら考えなかった私にとって、JAICOH で出会う若者たちの真摯な視線、エネルギーはまぶしくも、うらやましくもあり、拍手喝采！。トンガ王国を活動の拠点とする南太平洋医療隊にも数多くの学生が参加してくれます。学生たちの若さと破天荒さは固くなった私の頭には心地よい刺激であり、幼稚さもトンガの人々に好感を持って迎えられています。これから多くの若者に支えられ活動が発展するものと信じ、JAICOH に若いリーダーが生まれることを願っています。変化を求め、よりよい世界が生まれることを期待するのは私だけではないでしょう。

'01

## 国際歯科保健協力団体における大規模災害時の歯科保健医療体制

○中久木康一（東京医科歯科大学顎顔面外科学分野）

小室貴子（荒川区保健所健康推進課歯科担当） 深井獲博（歯科保健国際協力協議会）

筆者らは厚生労働科学研究費補助金（健康安全・危機管理対策総合研究推進事業）の助成による「大規模災害時における歯科保健医療の健康危機管理体制の構築に関する研究」を行っている。歯科支援が必要となる大規模災害は主に大地震と考えてよいと思うが、この救護体制は歯科医師会を中心に行政の歯科担当や病院歯科／大学病院、そして歯科衛生士会／歯科技工士会などとともに形づくられてきている。しかし、歯科医療従事者は診療所に属するものが84.7%を占めており、大規模災害時には自身の診療所の復興や担当患者への連絡等で避難所での支援を優先することは難しく、また市販されている訪問診療用のユニットは大人数に対応するものではない。そこで、平時に海外で大人数に対し巡回診療等を行うような歯科保健の国際 NGO が、健康危機発生時に資源・人材において有用な担い手となる可能性について、歯科保健医療国際協力協議会作成の2002年版 NGO ダイレクトリーを参考にインターネット上にて検索した歯科保健の国際 NGO 23 団体に対し、2008 年 1 月に郵送によ

る自己記入式のアンケート調査を行った。

11 団体から回答が得られ（回収率 47.8%）、うち有効回答数は 9（有効回答率 39.1%）であった。回答した 9 団体中巡回歯科診療活動をしているのは 3 団体、口腔ケア活動が含まれるのは 4 団体であった。日本国内での大規模災害時における歯科保健医療の救護体制の経験があったのは 1 団体のみであり、救護体制の準備があったのは 2 団体にとどまった（ほか 1 団体は準備の予定あり）。6 団体は主に団体の設置目的と異なることを理由に今後も救護体制の準備は予定しておらず、人員確保や予算の問題、そして行政からの要請がないことも理由としてあげられた。自分の団体が日本国内での保健医療の体制整備に早急に取り組むべきだとしたのは 1 団体にすぎなかった。自由回答からは、大規模災害時の支援は地域との日常的関わりの延長であるという考えや、日頃からのコーディネーターとしてのトレーニングの必要性も指摘され、歯科保健医療の救護体制は、大規模災害時などの健康危機発生時のみならず平時からの支援の延長であること



が示唆された。

<感想>

今回数年ぶりに JAICOH 学術集会に参加させていただいたが、他にも被災地への支援に関する報告もあり、参考になる部分も多かった。また、

学生による活発な発表もあり、次回で第 20 回を迎えるとのこと、今後の発展が期待される。

1972

## フィリピンネグロス島での口唇口蓋裂手術支援活動の報告

土肥雅彦／神奈川歯科大学顎顔面外科学講座顎顔面外科学分野（口腔外科）講師、  
神奈川歯科大学南東アジア支援団（KDC-SAS）

第 19 回 JAICOH 総会で、2007 年の KDC-SAS によるフィリピンネグロス島での口唇口蓋裂手術支援活動について報告致しました。

2001 年より神奈川歯科大学顎顔面外科学講座はフィリピンネグロス島にて口唇口蓋裂児の慈善手術を行ってきました。そして 2007 年よりスマトラ沖地震によるタイ津波被災地域での歯科ボランティア活動で実績のある神奈川歯科大学南東アジア支援団（Kanagawa Dental College Southeast Asia Support: KDC-SAS）とコラボレートしてこのボランティア活動をさらに充実し継続しております。フィリピンではまだ多くの国民の収入が低いうえに、患者への公的支援がないため口唇裂や口蓋裂があるにもかかわらず治療を受けられない人たちがたくさんいます。第 5 回目にあたる 2007 年も久保田英朗 KDC-SAS 代表（神奈川歯科大学学長）を団長として香月武神奈川歯科大学客員教授他 5 名の歯科医師と 6 名の歯科大学学生のメンバーで 7 月 29 日から 8 月 5 日の日程でボランティア活動を行いました。

活動場所はネグロス島ドマゲッティー市の病院です。短い日程ですが 4 歳から 13 歳の 12 名の子供たちに手術を行うことができました。手術後の子供たちの人生は 180 度変わるので、患者さん本人もご両親も大変喜びます。



医師や歯科医師は困っている人達の役に立てよう日頃から準備を怠ってはならないと思います。そして、自国の医療水準を向上させると同時に、自分たちの医療技術を世界の人々にも差し向けていくべきではないでしょうか。今回この総会で、それぞれの団体によって活動内容は異なっていますが、同じ志をもった方々とお会いして有意義なディスカッションができたのではないかと思います。

1989

1989

1993

1993

2004

( )

KDC-SAS

19 JAICOH

2008